

初等教育教員養成校における授業実践力の育成

教育実習事前事後指導を通して

Development of practical lesson skills in a Training School For Primary Education Teachers
Through pre-and post-guidance on teaching practice

反町 京子

SORIMACHI KYOUKO

授業実践力・資質・能力・コンピテンシー・教育実習・模擬授業

1 はじめに

本学は短期大学であるため、2年間で教職に関する基礎科目すべてを履修する。したがって、ほぼ毎日1限から5限までの授業があり、初等教育コースにおける教育実習は2年間で、観察・参加実習、本実習あわせて4週間の日程が組まれている。学生が実習に臨むにあたり教育現場の現況を考えるとその内容は多岐にわたり、学ぶべきことは山積されている。それを短期間の限られた授業枠内でどのように構成していけばよいのかは大きな課題である。

教育実習に関するカリキュラム内容は教育実習の事前指導においては、教育課程の概要、学習指導案の作成や授業の進め方、実習中の服務や記録簿の書き方等が中心となり、事後指導においては実習報告会を持ち互いに情報共有し、教育実習の振り返りと実習で学んだことのまとめ等を行っている。模擬授業については、1年の教育実習Ⅰで教科等限定せずに取り入れている。各教科等の教科教育法の授業と並行して実施される。

今年度はコロナ禍のため、実際には前期、後期授業の半分はオンデマンド方式の遠隔授業であったため、模擬授業を通して学ぶ機会は限られてしまった。その様な状況ではあったが、教

育実習の事前と事後の学生の意識調査や模擬授業に関する前後アンケート調査をもとに、授業実践力*をつけるための授業内容について見直しを図るために本研究を進めることとした。

*授業実践力とは従来授業力とされているものとはほぼ同義ではあるが、コンピテンシーとしての『活用する力』を強調するために本研究において以下使用する。

2 研究方法

(1) 各調査による実態の把握と考察

- ・教育実習の事前・事後における意識調査
(本学初等教育コース1, 2年生 21名)
- ・模擬授業の実践前と実践後の授業実践力についてのアンケート調査
(本学初等教育コース1, 2年生 21名)
- ・現職教員の授業実践力のとらえ
(千葉市内小学校の教職員 23名調査)

(2) 文献、教育関連書籍等からの情報収集

- ・千葉市教育センター報告書82集
「達人に学ぶ授業力」(千葉市教育センター・千葉大学)
- ・教育課程編成に関する基礎的研究 報告書5および報告書7(国立教育政策研究所)

3 研究内容

- (1) 新しい教育で求められる授業実践力
 - ・新学習指導要領における教育の方向
 - ・コンピテンシーベースの資質・能力
 - ・授業実践力と学習構造
- (2) 授業実践力を育成するカリキュラム
 - ・アンケート調査の分析による授業実践力（コンピテンシー）
 - ・カリキュラムの編成へむけて

4 新しい教育で求められる授業実践力

新学習指導要領における教育の方向

昨年度「新学習指導要領における教育課程編成に関する研究」（千葉敬愛短期大学研究紀要第42号）においては、新学習指導要領が目指す方向をとらえ、カリキュラムの編成に関する一考察を進めた。その中では、新学習指導要領が、今までの「新しい学力観」「生きる力」を踏まえつつも、未来を見据えた子供たちに付けるべき資質・能力を核とした方向が示されていることを確認した。それは、教育の目的、目標から、学校教育が長年その育成を目指してきた「生きる力」に現代的な意義を加え改めてとらえなおしたものであると同時に「社会に開かれた教育課程」をキーワードとした大きな枠組みの改革である。

その具体的な内容について先の研究紀要においては次の3点について述べている。

- 1 育成すべき資質・能力の明確化
- 2 カリキュラム・マネジメントの確立による教育活動の質の向上
- 3 「主体的・対話的で深い学び」の実現による授業改善

各項目の内容についてはすでに周知されている。それぞれが独立した項目ではなく「学びの地図」（＊2017. 1.20 中央教育審議会答申補足資料参照）で示されたように密接に関連している。求めるものは、汎用的な資質・能力の育

成であり、それらが行動特性として現れる段階までの力を想定している。これが、教科の枠を超えて育成を目指す資質・能力つまり「コンピテンシー」ととらえてよいと考える。

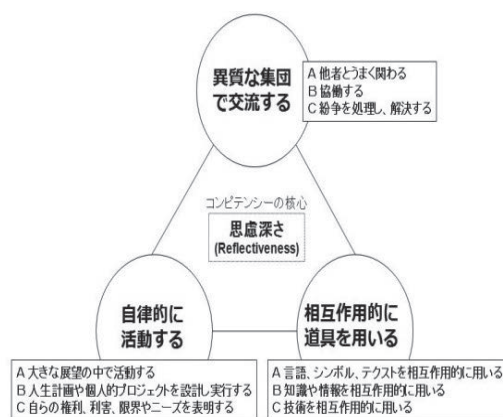
コンピテンシーベースの資質・能力

(1) キー・コンピテンシー

コンピテンシーについては、様々な文献にて説明されている。

国立教育政策研究所「キー・コンピテンシーの生涯学習政策指標としての活用可能性に関する調査研究」では、下図1【3つのキー・コンピテンシー】が示されている。

図1 【3つのキー・コンピテンシー】



この図には以下の説明がある。

「キー・コンピテンシーとは、OECD が1999年～2002年にかけて行った「能力の定義と選択」(DeSeCo) プロジェクトの成果で、多数の加盟国が参加して国際的合意を得た新たな能力概念です。20世紀末頃より、職業社会では、コンピテンシーという能力概念が普及し始めました。この考え方は、次図に示しましたように、従来の学力を含む能力観に加えて、その前提となる動機付けから、能力を得た結果がどれだけの成果や行動につながっているかを客観的に測定できることが重要と視点から生まれてきました。言葉や道具を行動や成果に活用できる力(コンピテンス)

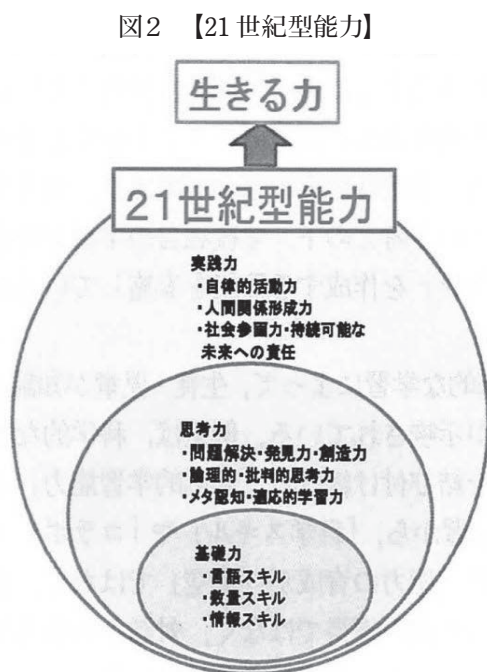
の複合体として、人が生きる鍵となる力、キー・コンピテンシーが各国で重視され始めたのです。」

https://www.nier.go.jp/04_kenkyu_annai/div03-shogai-lnk1.html より引用

(2) 21世紀型能力、生きる力とのつながり

また「教育課程の編成に関する基礎研究 報告書 5 社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則」(2013.3 国立教育政策研究所教育課程センター)において21世紀型能力の試案が示され、報告書 7(2014.3)において、「生きる力」につながる下図2【21世紀型能力】が示された。

この捉え方は、文部科学省有識者検討会「論点整理」(2014.3)においても同様に示されている。



(「教育課程の編成に関する基礎的研究 報告書7」 国立教育政策研究所 2014.3 より)

このような過程をたどり、新学習指導要領では育成を目指す資質・能力については、次のように表現されている。

- (1)知識及び技能が習得されるようにすること。
- (2)思考力、判断力、表現力等を育成すること。
- (3)学びに向かう力、人間性等涵養すること。

(新学習指導要領第1章総則の第1の3)

さらに育成すべき資質・能力に対応した教育目標・内容については、「資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」が示した3つの視点がある。

ア教科等を横断する汎用的なスキル(コンピテンシー)等に関わるもの

イ教科の本質に関わるもの(教科等ならではの見方・考え方など)

ウ教科等に固有の知識や個別スキルに関するもの

学習評価についてもこれらに対応すべく、評価の基準を「何を知っているか」とどまらず、「何ができるか」へと改善することが必要であることが述べられている。

このように、教科の内容が先にあって、その中で資質・能力をいかに育むかという従来の論理の導き方が逆になり、まずは、「目の前の子供たちにどんな力を付けなくてはならないのか」から学校教育全体で育てるべき資質・能力を明確にしていく教育活動が求められ、新学習指導要領が作られていることはすでに周知されている。

この資質・能力を育むために「主体的な学び」の実現としてアクティブ・ラーニングの必要性がうたわれ授業改善の方向が示されている。

「資質・能力」を基盤とした教育が深くコンピテンシーと関わりをもち、新学習指導要領の根幹にかかわる概念であるかは、奈須正裕氏の著書『「資質・能力」と学びのメカニズム』(東洋館出版社 2017)の中でも多く述べられている。

次世代を拓く力としては、コンピテンシーを「4つの修得知モデル」*として位置付けている鈴木敏恵氏の「成長への希求」とした捉えはさらに大きく「生き方」キャリア設計に寄与しているといえる。

* 4つの修得知モデル

「アクティブに自ら学び成長する人になるために、授業や研修だけがその学習機会ではないとすれば何をいつ、どう身に付け成長していったらいいのでしょうか。ここに『次世代教育—4つの修得知モデル』を提案します。後略」と述べ、それらは以下AからDの4つとしている。

A 知識・スキル (①基本②専門③融合)

B 知性・精神 (①高い人間性②真理希求③哲学・善悪④感謝・献身)

C コンピテンシー (①仕事—力量・能力②活用力・応用力③業務遂行力)

D ビジョン力 (①課題発見力②目標設定力③課題解決力④提案力)

『AI時代の教育と評価』(教育出版 2017)
20, 21 頁より引用、抜粋

授業実践力と学習構造

現段階では学校教育との関連でコンピテンシーを捉えようとしているが、それらは一様ではなく、また個々単一のものでもなく、相互に関連しながらスパイラルに育まれていくと考える。

コンピテンシーを文献情報等から教育現場における児童の姿で平易に言い換えれば、知識や技能が習得されて「知った」「わかった」「理解した」「できた」状態からさらに「現実に行える」「活用できる」「応用できる」力として捉えることができる。その根底に「考える」(思考)が位置する。

先に述べたように「授業実践力」としたのは、「授業力」という言葉の概念の中にコンピテンシーの「現実に行える、活用できる、応用できる」力の概念を含ませたためである。

以下、授業実践力として取り上げた4つの力は、千葉市教育センター研究報告書82号(達人に学ぶ授業力)の『授業の4力(よぢから)』をもとにしている。

『授業の4力』

A 意欲の喚起と向上力

- ・意図的な体験活動を組み入れる
- ・学習材を工夫する(学習材の選択も含む)
- ・学習環境を整える
- ・ユーモア、励ましなどの言葉がけをする
- ・評価の工夫する

B 授業構成本力

- ・学習過程構想する(学習指導案を書く力)
- ・教材(学習材)分析などの研究
- ・1単位時間の構成(導入、展開、まとめ)
- ・学びの発信、共有

C 授業コミュニケーション力

- ・学習者の話を受け止める(聴く力)
- ・学習者の学習状況を適切にとらえる(観る力)
- ・学習者の学習状況に応じてアドバイスする(助言・話す力)
- ・話しやすい雰囲気づくり(人的環境を整える)

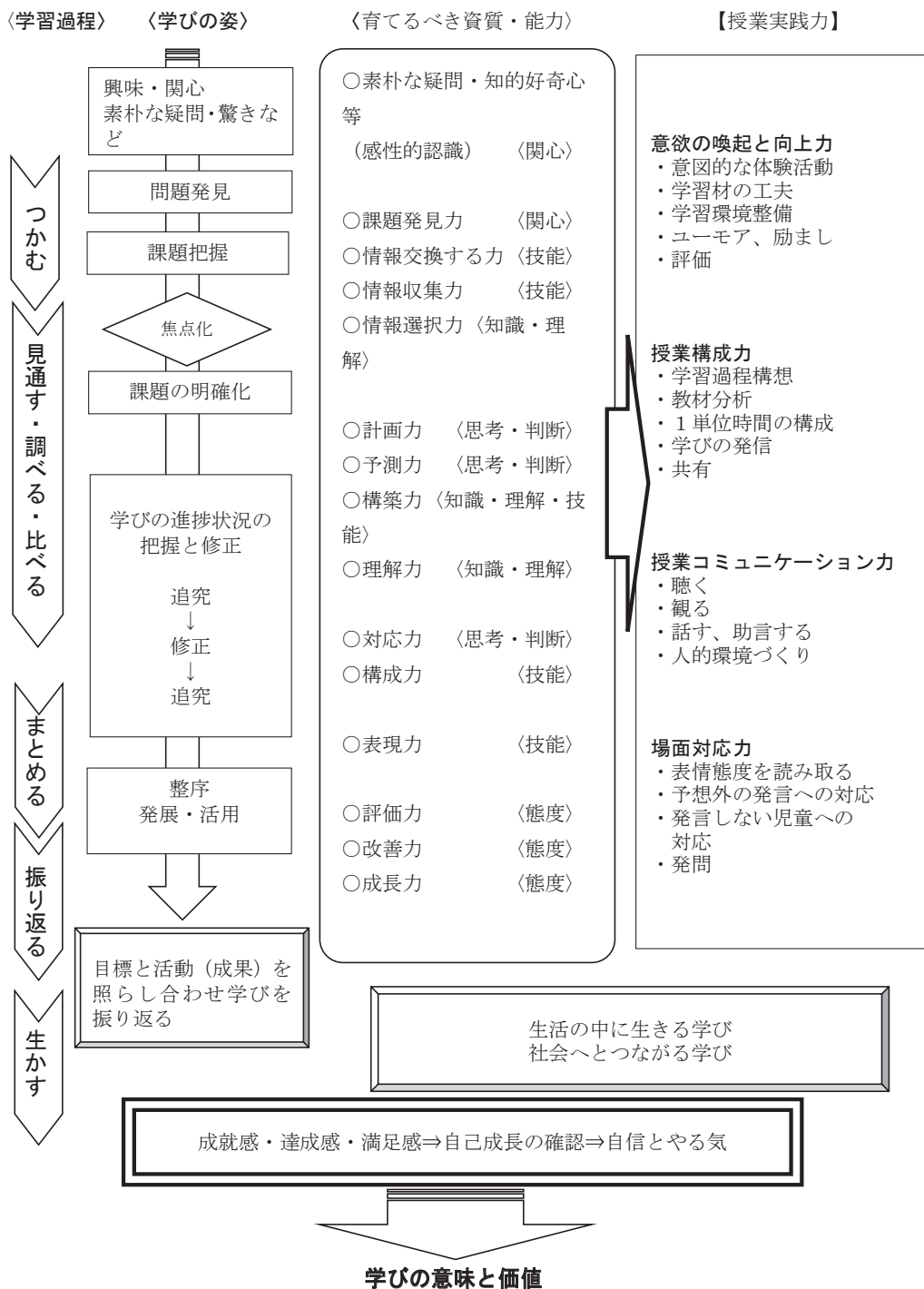
D 場面对応力

- ・学習者の表情・態度を読み取る
- ・予想外の発言に対応する
- ・発言しない学習者への対応する
- ・発問する(発問内容・方法の工夫)

授業レベルでとらえたこの授業実践力と学習構造の関係は、「主体的な学びを形成するプロセスの追究」(千葉敬愛短期大学紀要第39号)で示した「学習構造図と資質・能力」の図を使い、図3【学習構造と授業実践力】とした。(次頁参照)

冒頭で述べた「授業実践力」は、図で示したように、学習過程に沿ってくりかえし発揮される。本研究においては、主体的な学びを通してその意味と価値を実感する教育活動全体の中で育てる資質・能力のうち、特に教師が授業レベルで発揮する行動特性を伴う力として捉えている。

図3 【学習構造と授業実践力】



5 授業実践力を育成するカリキュラム

アンケート調査の分析による授業実践力

(1) 教育実習の事前・事後の意識調査

本学初等教育コースでは、従来1年生対象の観察参加実習(5日間)と2年生対象の教育実習(15日間)が通年予定されている。

今年はコロナ禍のために実習期間や内容、日程等の変更があった。実施期間及び実習場所は以下の通りである。

《令和2年度の初等コース教育実習》

1年生13名 観察参加実習(5日間)

実習校 佐倉市公立小学校

令和2年9月14日から8日

2年生8名 教育実習(10日間)

令和2年9月7日～18日(7名)

10月以降(1名)

実習校 千葉県内公立小学校

1年生観察・参加実習、2年生の教育実習の事前、事後の意識調査が以下の通りである。

《事前》 観察参加実習、教育実習事前調査(設問に対しての自由記述方式)

実施日 令和2年9月1日

対象 現代子ども学科初等コース

1年生13名、2年生8名

*実施者の総数および学年のバランスを考慮し、人数表記とする。

【設問】

- ①あなたの教育実習の目的は何か。
- ②目的を達成するための具体的な目標は何か。
- ③その他、実習への期待感、不安など(略)

【結果】

①教育実習の目的

回答	1年	2年
・教師の一日の実務内容を知る	5	0
・教師としての立ち居振る舞い	3	1
・教師として必要なこと	1	1
・目指す教師像を具体化	2	1
・授業方法を知る	4	1

・生徒指導を学ぶ	2	3
・学級づくりのこつ	3	1
・児童との接し方	8	5
・個別の支援	2	2

②目的を達成するための具体的な目標

〈担任観察、担任との関わり〉	1年	2年
・教師としての言動	7	4
・授業づくり、授業の進め方	3	0
・わからないことは聞く	2	3
〈児童観察、児童との関わり〉		
・積極的に関わる	8	3
・たくさん遊ぶ	1	1
・児童の目線に立つ	1	1
・名前と特徴を覚える	3	2
〈その他〉		
・毎日目標を持つ	1	0
・感じるセンサーを常に働かせる	1	0
・記録する	1	0
・前向きにとらえる	1	0
・あいさつ、笑顔を忘れない	4	0
・環境を学ぶ	0	1
・教師間の関わり合いを学ぶ	0	2
・ハウレンソウを忘れない	0	2
・教師になりきる、全力投球	0	2
・日々反省し改善し向上する	0	2

③(略)

《事後》 観察参加実習、教育実習事後調査(設問に対しての自由記述方式)

実施日 令和2年9月23日(1年生)

令和2年9月24日(2年生)

対象 現代子ども学科初等コース

1年生13名、2年生7名

(2年生8名のうち1名は実習期間が10月のため未集計)

【設問】

事後①教育実習の事前授業で役に立ったこと(含む講義)

事後②やっておけばよかったと思うこと

事後③将来教師となるためにさらに学び深めること

【結果】

事後①教育実習の事前授業で役に立ったこと
(含む講義)

〈ガイダンス〉	1年	2年
・実習の目的	1	1
・学校内での立ち居振る舞い	1	1
・教師の一日	1	0
・教育実習生の3週間 (DVD)	1	2
・実習記録の書き方	0	2
・服装、持ち物等実習の準備	3	2
・子どもとのかかわり方	1	0
・心構え	1	0
〈教育実習Ⅰ、Ⅱの授業〉		
・模擬授業	1	3
・自己紹介の仕方	1	1
・目指す教師像のワークショップ	1	2
・実習生の心得、服務	1	1
・マインドダウン発見力	1	2
・学級経営について	0	2
〈その他〉		
・算数 (2・0)	2	0
・書写 (2・0)	2	0
・国語 (2・0)	2	0
・ピアノの実技	1	0
・教育課程論 (2・0)	2	0
・ポートフォリオで学びを整理し 見える化したこと	2	0
・事前の実習校の概要把握	1	0
・話し方	1	0

事後②やっておけばよかったと思うこと

〈学習指導、生徒指導等〉	1年	2年
・学年相応の授業内容	5	1
・模擬授業	0	3
・授業づくり (主体的に学ぶ授業)	5	4
・教材づくり	0	1
・机間指導の声がけ	0	1
・個への対応	1	3
・発達段階に応じた接し方	2	1
・生徒指導、異性間の問題	2	0
・トラブルへの対応	2	1
・児童との距離	1	0
・緊急時の対応	0	1

〈その他〉(各1名)

・漢字・PC 操作スキル・児童に人気の遊び

- ・体を動かす運動・ビジネスマナー・セクハラに
ついての理解
- ・コロナ禍における集団行動

事後③将来教師となるためにさらに学び深める
こと

	1年	2年
・一人一人の良さを引き出す授業	0	1
・児童の発達段階の特徴と接し方	7	1
・児童との距離の取り方	3	0
・学習指導 (学習指導案作成、板書、 発問、授業準備含む)	7	4
・トラブル対応 (2・0)	2	0
・親との関係 (家庭支援、虐待対 応等)	1	1
・全体指導	1	0

以上が記述による回答である。

【考察】

以上の結果から、内容としては、A 学習指導、B 生徒指導、C 学級経営であり、各々における視点は、教師としての仕事と児童の実態把握ということになる。

事前調査結果で分かるように目的と目標の意味(概念)の混同がみられる。事前指導において「教育実習の目的」の視点を絞り、より明確に言語表現し、さらに「教育実習の目標」については、目標の意味からきちんと理解し、コンピテンシーレベル(具象的に行動目標として役に立つこと)にしておくことが重要である。

そのために事前の指導の中で、目標はスモールステップで確認しておきたい。実習の手引きや要項の内容についてはワークショップ形式などのグループワーク等で学生同士考えを共有し一人一人が自分事として問題意識深めておくことが大切である。

事前のガイダンスで服装、持ち物の説明が役に立っている。当たり前と思うものでも意外とわからない、知らないことが多いのに驚かされる。説明をする際、言葉の読みあげだけでなく実際にどのような場でどんなものが必要なのか丁寧に

説明することが求められている。このように事前指導におけるガイダンスは、教育実習の実務的な内容が多いが、事後調査結果からわかるように授業づくり等への不安も大きい。事後調査における「将来教師となるためにさらに学び深めること」として、発達段階をふまえた児童への接し方や、学習指導が挙げられている。授業の作り方から板書や発問に至るまでの授業関連の内容についてもさらに検討修正を加えカリキュラムに取り入れることが必要である。

(2) 模擬授業前後のアンケート調査

次に模擬授業の授業実施前と後で「4力」に関するアンケート調査をした。

本学初等教育コースの模擬授業は、教育実習Ⅰ(1年生前期必修科目)及び各教科等の教科教育法(主に2年生)において、実施されている。模擬授業についても今年はコロナ禍のために対面授業の期間が例年の半分に、従来通りに実施することは困難であった。教育実習同様に模擬授業の実践内容、日程等の変更はあったが、1年生は教育実習Ⅰにおける模擬授業を対象として、2年生は生活教育法の模擬授業および教育実習校での授業実践も踏まえて、授業前・授業後のアンケート調査を行った。

令和2年度の初等コース1年生

対象 1年生13名

授業前アンケート

令和2年11月27日実施

授業後アンケート

令和2年12月25日実施

◎1年生後期教育実習Ⅰにおける模擬授業は、道徳と国語、算数の教科で展開した。アンケートは後期の対面授業が始まってから回答したものである。

令和2年度の初等コース2年生

対象 2年生8名

授業前アンケート

令和2年11月24日実施

授業後アンケート

令和2年12月23日実施

◎2年生はおもに後期生活科授業における模擬授業および実習校での授業実践ふまえて回答した。

1年生、2年生共に、授業前、授業後アンケートの内容は同じである。

設問(アンケート用紙)および調査結果のグラフは次の通りである。

- ① アンケート用紙
- ② 学生アンケート結果
 - A 1年生模擬授業実施前後比較
 - B 2年生模擬授業実施前後比較
 - C 下位概念の比較
- ③ 教員アンケート結果

アンケートに示した「授業実践力」については、前出図3【学習構造と授業実践力】で示した「意欲の喚起と向上力」「授業構成力」「授業コミュニケーション力」「場面対応力」である。主体的な学びを通して『学びの意味と価値』を実感する教育活動全体の中で育てる資質・能力の中で特に教師が授業レベルで発揮する行動特性を伴う力である。

①アンケート用紙

授業力向上に関するアンケート

＊このアンケートは初等教育における授業力向上に役立てるためのものです。
模擬授業に関しての調査で、大学における初等教育のカリキュラム等の研究の資料となります。個人を特定、評価するものではありません。以上同意された方はご回答ください。

あなたが考える授業をするのに大切なこと（必要な力）は、なんですか？

＊4つの力は、大切だと思う順番を入れる

＊コンピテンシーの中から7つ選んで○を付ける

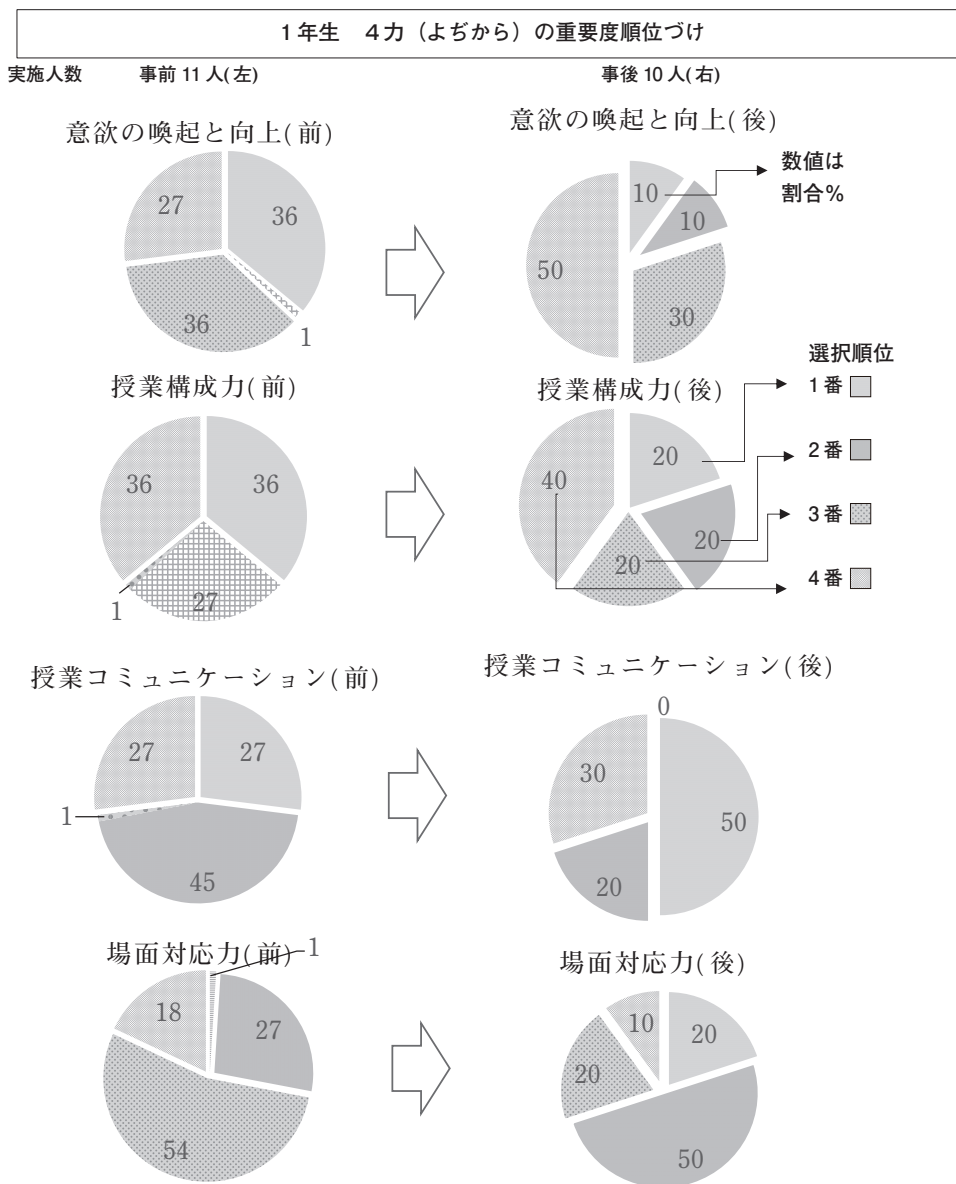
授業の4力	順	コンピテンシー	○
意欲の喚起と向上力		・意図的な体験活動を入れる	
		・学習材を工夫する（学習材の選択も含む）	
		・学習環境を整える	
		・ユーモア、励ましなどの言葉がけをする	
		・評価の工夫をする	
授業構成力		・学習過程構想力（学習指導案を書く力）	
		・教材（学習材）分析などの研究	
		・1単位時間の構成（導入、展開、まとめ）	
		・学びの発信、共有	
授業コミュニケーション力		・学習者の話を受け止める（聴く力）	
		・学習者の学習状況を適切にとらえる（観る力）	
		・学習者の学習状況に応じてアドバイスする（助言・話す力）	
		・話しやすい雰囲気づくり（人的環境を整える）	
場面对応力		・学習者の表情・態度を読み取る	
		・予想外の発言に対応する	
		・発言しない学習者への対応する	
		・発問する（発問内容・方法の工夫）	

＊項目は「達人に学ぶ授業力」千葉市教育センター報告書を参考にしています。

＊コンピテンシーについては授業内での説明の通り、「授業力」を養う上での「行動として現れる力」「活用できる、実現できる力」の意味を重要視して「授業コンピテンシー」とします。

このアンケートは、本学1,2年生には模擬授業の実践をする前と後で同じ項目で調査した。現職教員へは令和2年11月に実施した。

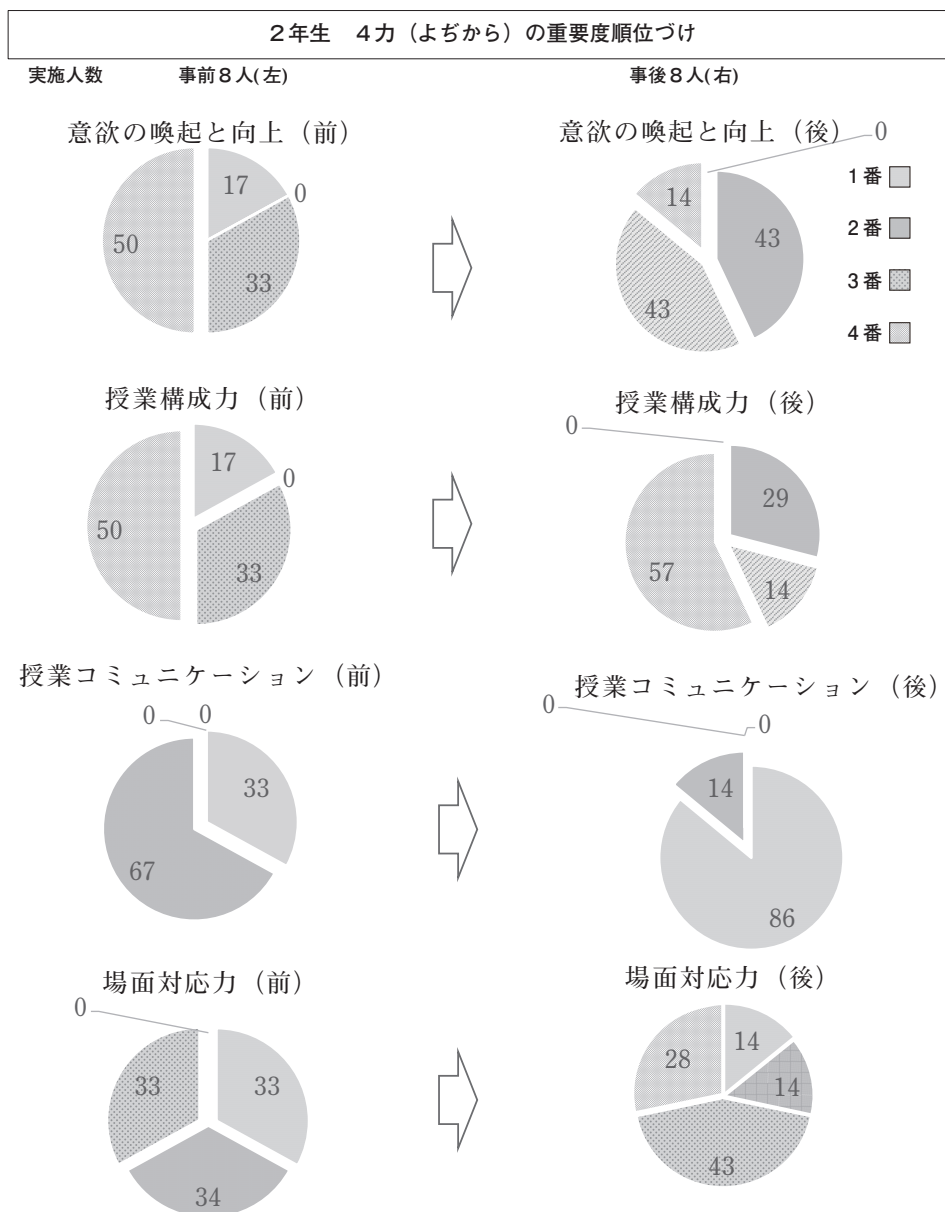
②学生アンケート結果
A 模擬授業実施前後比較(1年生)



【考察】

1年生の結果から、初めから重要度として高かったのは「授業コミュニケーション力」である(上位1, 2番選択72%)。前後で数値が上がったのは「場面对応力」(1, 2番選択28%⇒70%)であった。これは模擬授業の事前から児童とのコミュニケーションの重要性を感じていたということであり、実際に授業をしてみると授業場面での様々な実態に対する対応力が必要であることが理解されたのだと思う。

②学生アンケート結果
B 模擬授業実施前後比較(2年生)



【考察】

2年生の結果は、前後で「授業コミュニケーション力」の重要度の捉えが大きくなっている(上位1, 2番選択33%⇒86%)。模擬授業経験の浅い1年生と経験の差はあるが、学生にとっては「授業コミュニケーション力」(児童との関わり合い)については模擬授業で多様な児童の実態を想定しておく必要がある。次いで「意欲の喚起と向上力」の捉えが事後において高くなっている(上位1, 2番選択17%⇒43%)。2年生は教育実習を含め、実際に授業実践を重ねることで、児童の意欲の喚起が向上力につながることを実感したということになる。

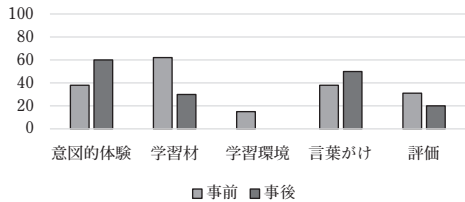
②学生アンケート結果

C 下位概念の比較

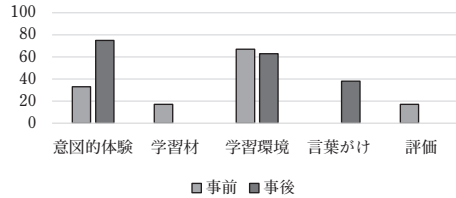
調査対象及び人数 初等教育コース1年13名(左)

2年8名(右)

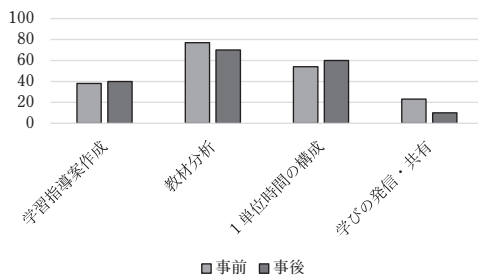
意欲の喚起と向上(1年)



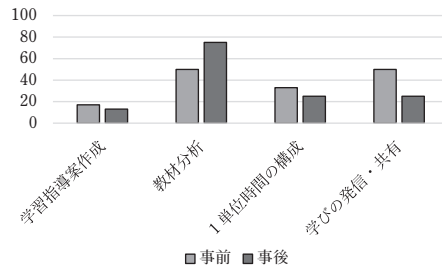
意欲の喚起と向上(2年)



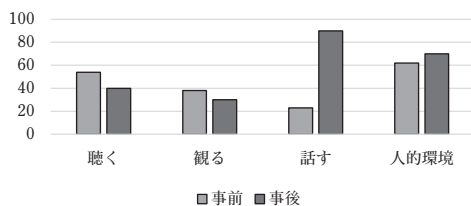
授業構成本力(1年)



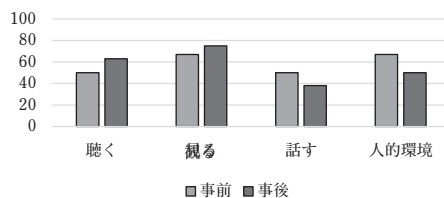
授業構成本力(2年)



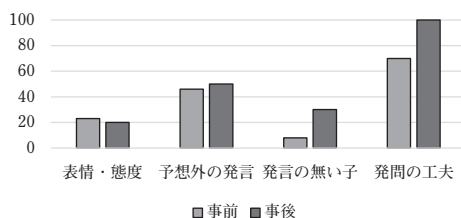
授業コミュニケーション(1年)



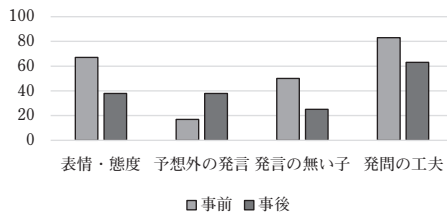
授業コミュニケーション(2年)



場面对応力(1年)



場面对応力(2年)



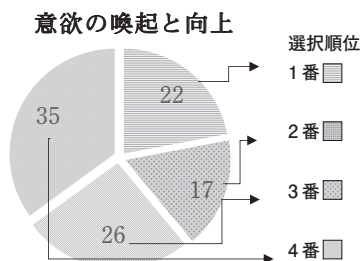
【考察】授業実践力の下位概念を比較すると、全体では「発問の工夫」に対する割合が学年、前後を問わず高い。模擬授業の前後で調査したので、授業における教師の発問は最大の関心事であり重要事項だといえる。「教材分析」も同様である。1年と比較して2年の数値が高いのは「学習環境を整える」「学習者の表情・態度を読み取る」「学習者の状況を適切にとらえる(観る力)」の気付きである。逆に1年の数値が2年より高いのは「学習指導案を書く力」「1単位時間の構成」である。これらは模擬授業や実習経験ではあるが教師の立場としての授業経験差による結果だといえる。場面对応力の1年の「予想外の発言に対する対応」の割合が2年では減っており、逆に「学習者の表情や態度を読む」は1年より2年の重要度割合が高い結果は興味深い。これも授業経験の差と言えよう。

③教員アンケート結果

4 力の重要度（左円グラフ）と下位概念（右 棒グラフ）

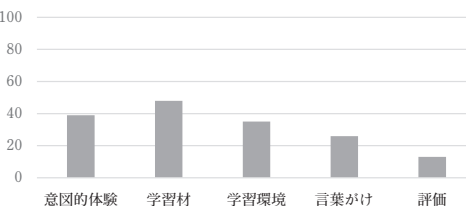
現職教員の授業実践力に関するアンケート結果（千葉市内公立小学校 教員 23 名）

4 力の重要度(左側円グラフ)

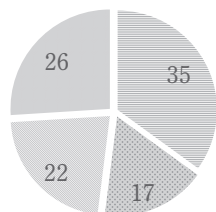


下位概念の比較(右側棒グラフ)

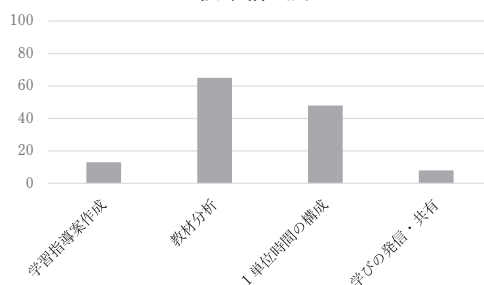
意欲の喚起と向上



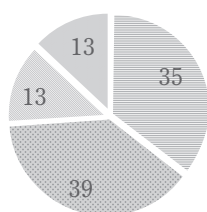
授業構成力



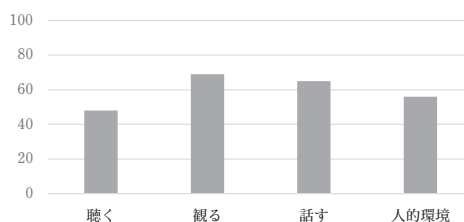
授業構成力



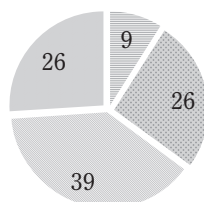
授業コミュニケーション



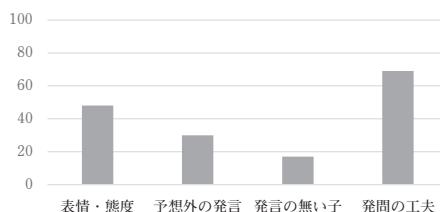
授業コミュニケーション



場面对応力



場面对応力



【考察】 教員アンケートの結果では、左側円グラフ 4 力（よぢから）の重要度順位を見ると「意欲の喚起と向上力」「授業構成力」「場面对応力」の 3 項目は、重要度 1, 2 番選択の状況がほとんど同じ様相（合わせて 35 ～ 52%）を示している。ところが「授業コミュニケーション力」はそれらに比べて 1, 2 番選択の割合が高い（74%）。さらに右側棒グラフ下位概念の比較を見ると、授業コミュニケーション力の下位概念「観る、聴く、話す、人的環境」の割合は学生アンケートの結果同様に高いが、学生との違いは「教材分析」や「学習材の工夫」の重要度が高いことである。この点については、現職教員の捉えを参考に学生の実態を踏まえながらカリキュラムの内容を工夫したい。

今回、授業実践力として「4力」を取り上げた。それは千葉市教育センターの報告書によれば現場の達人と呼ばれる教師たちが授業力を伸ばした要因の一番に授業研究を挙げ、それをもとに授業の力を4つのキー・コンピテンシーとして「4力」と示したとしているからである。アンケート調査の母集団人数が少なく、汎用的な方向づけはできないが、授業の中で軽重をつけ、本学の学生の実態に応じた事前事後指導の充実を図りたい。

カリキュラムの編成へむけて

今後の短大における学生の授業実践力育成を考える上で、先行研究「教員養成大学における模擬授業の系統的指導の在り方」（千葉敬愛短期大学研究紀要 39 号 2017.3 山中譲）がある。その本論において「模擬授業の系統的指導内容」として下表の系統指導が示されている。

	1年次	2年次
目指す	授業の基本	自分の考える授業
授業観	目指す授業の基礎	目指す授業の具体
教材	教材研究の方法	教材研究の深さ
研究	学習指導要領の読み方 教科書研究	内容の系統性・関連性 他社の教科書との比較
指導	教師の話し方	効果的な話し方
技術	発問の基本 板書とは何か	発問と授業の流れ 思考を深める板書
授業の 進め方	教師中心から活動中心 の授業	活動中心の授業 子ども同士の学び合い
その他	学生が小学校のとき受 けた授業の振り返り により授業を考える	2年次教育実習の経験 をもとに授業を振り返 る

表からわかるように模擬授業の観点として3点示されている。1つは、目指す授業像を明確にすること、2つは教材研究の基礎を身につけること、3つは授業を行う上での基礎的な指導方法を身につけることとしている。

本研究では「授業実践力」として4力「意欲の喚起と向上力」「授業構成力」「授業コミュニケーション力」「場面对応力」を取り上げ教育実習の事前事後調査および模擬授業前後のアン

ケート調査から学生の実態をとらえた。先行研究における3つの観点と授業実践に関わる資質・能力の育成としての授業実践力を合わせ考えると次のことが言える。

授業像を明確にすることに関連しては、教育実習の事前指導において「目的を明確にして目標を具体化（言語化）する」ことを十分行う必要性があげられる。このことが授業実践における目標のとらえ方にもつながる。観察・参加実習での経験、確かな情報源による情報収集等をふまえ、グループワークなどの授業形態を組み入れることも考えられる。

教材研究については「授業構成力」として、教材を工夫することや教材の解釈がなぜ大切なのかという理解の上で、「教材を教える」から「教材で教える」授業ができるようにすることを目指す。そのための具体的な情報・資料収集の方法、教材探しのコツを授業内容に組み込み教材研究の内容の深め方とそのよさについて理論と実践から体得する。

指導方法については、板書・発問・教師の話し方等が基礎内容として挙げられてきたがさらに「児童主体の学び」となる下位概念の学習過程の工夫、1単位時間の授業構成の工夫などについて深める工夫が必要である。これらは、模擬授業を通して具体的に学ぶことが有効である。電子黒板等を活用し客観的に振り返りができるようにして指導効果を実感できるように進めたい。

さらに短期間で効率よく学び深めるために内容の精選と方法を吟味し、毎時の授業レベルで学生の授業実践力を高めていく必要がある。それは、平常の学内授業において、課題別追究型の学生主体の学び方の工夫やグループ協議による集団思考の練り上げ、プレゼン等の発信の工夫等による、見方、考え方の広がりや深まりを期待するものである。現在学内の授業でもウェビング、ランキング、マンダラート、フィッシュボーンなどの思考ツールを効果的に取り入れたり、タブレットなどの情報機器の活用を進めたりするなど、模擬授業で生かすことができる授業方法は

多々実践されている。この様なカリキュラム構成を工夫し授業内容を充実させるには、さらに教員同士、職員と教員との縦横の連携も重要となる。

今後の課題としてカリキュラム構成の工夫と共に、教師力としての人間性の涵養につながる関係形成力の育成が挙げられる。

アンケート調査からは学生、現職教員ともに「授業コミュニケーション力」の必要性を強く感じていた。学生自身の声として上がっている「実際に児童とどのように接したらよいのか、一人一人の児童の声をどのように受け止められるのか、いろいろな考えを皆で共有するにはどのようにしたらよいのか」などについては、課題を共有し教育実習の経験も生かし、具体的な事例を挙げながら学び深めておく必要がある。

6 おわりに

先般、本学の既卒者に「現場での困りごと」を調査した結果の中で「子供の指導に関すること」と共に「職場での人間関係」の数値が高いことが話題になった。「授業実践力」をつけるためのさらなるカリキュラム開発とともに、教師として現場でしっかり働ける教員としての資質・能力の育成という大きな課題が残る。

本学の初等教育コースは今年度入学した学生をもって最後の入学者となる。実際には今年度はコロナ禍のため、前期、後期授業の半分はオンデマンド方式の遠隔授業であった。学生自身の「本当に教職に就くための力がついているのか」というつぶやきが耳に届いている。しかし、この様な状況であるからこそ、学べることはたくさんある。マイナスをプラスに変え、前向きに進むためにも限られた時間と環境の中で、授業の充実を図り、学生一人一人の授業実践力の育成を目指したい。

〈引用文献・参考文献〉

- ・ 文部科学省「小学校学習指導要領 総則」(2019.2)

- ・ 文部科学省「中央教育審議会答申」補足資料(2017.1.20)
- ・ 国立教育政策研究所「教育課程編成に関する基礎的研究」報告書5(2013.3)
- ・ 国立教育政策研究所「教育課程編成に関する基礎的研究」報告書7(2014.3)
- ・ 国立教育政策研究所「キー・コンピテンシーの生涯学習政策指標としての活用可能性に関する研究」https://www.nier.go.jp/04_kenkyu_annai/div03-shogai-lnk1.html
- ・ 千葉市教育センター報告書 82 集 (2011.1)
- ・ 千葉市教育センター・千葉大学「授業の達人」(2011.1)
- ・ 東京学芸大学次世代教育研究機構「コンピテンシーの育成と評価」プロジェクト報告書 3(2017.3)
- ・ 奈須正裕「『資質・能力』と学びのメカニズム」(東洋館 2017)
- ・ 鈴木敏恵「AI 時代の教育と評価」(教育出版 2017)
- ・ 山中譲「教員養成大学における模擬授業の系統的指導のあり方」(千葉敬愛短期大学研究紀要第 39 号 2017.3)